Season Lao: From Sensibility to a Space of Contemplation

シーズン・ラオ（Season Lao）、感性から思索の間へ

釜山市立美術館 学芸研究室長　鄭鍾孝

現代美術の特徴の一つは、新しいものを自己化しようとする作家たちの尽きることのない試みである。しかし、新しいものへの物理的・概念的な探求は、すでに限界に達している。ギュスターヴ・クールベ（Gustave Courbet）が「天使を見たことがないから描けない」と宣言して以来、新しい表現への模索は続き、マルセル・デュシャン（Marcel Duchamp）がレディメイドの便器を選んで以来、多くの作家が作品に取り込む新たな媒体を渇望した。アヴァンギャルドの再現的現象が繰り返され、ポストモダニズムの時代には新しい媒体の限界が露呈したからである。

the Asian Art Museum in Nice, France

こうした状況の中で、アジアの作家の作品に表れ始めたのが「東洋性」であった。東洋的な素材と概念の二重的な特性は、アジアの作家の特権として作用したが、一部の西洋作家は早くから東洋思想や哲学を導入していた。その中で「余白」と「間」は欠かせない。余白は間へとつながり、間は「虚」へとつながる。しかし、真の「虚」とは無であることを意味しない。不要なものを取り除き、本質に立ち返る、あるいは別の何かを満たすための過程において存在するのである。

ここで、シーズン・ラオの作品と東洋美学との絶対的な関係を結びつけてみたい。彼の制作過程は、四つの重要な段階を経る。
第一は日常に生じる平凡な記憶を自らの内に内在させることである。彼は生家の貴重な記憶の場を、自身と周囲の人々へ広げ、認識を共有し、その空間を守る力へと昇華させた経験を持つ。カメラのアングルに収められる自然の風景も同様である。日常の動きと向き合う多くの記憶の中で、何が自分自身のものなのかを認識している。第二は捉える力の実践である。平凡を昇華することは、非凡を表現するよりも困難な営みである。彼が平凡な自然風景の中からイメージを捉える瞬間、すでにその想像は展示空間と結びついている。第三は「残すこと」と「削ぎ落とすこと」の判断である。その能力は直感的かつ感性的なところから働く。空間に関する東洋哲学の意識と接点を持ち、捉えられた風景のイメージが空間を通じて最大化できる環境が完成する。最後はそこに立つ者へ与えられる「思索の間」である。

Ritz Carlton Fukuoka

彼が試みる「最大化」の概念は、作品と空間のどちらかが主でどちらかが従となる垂直的な関係ではなく、作品と空間がフラットな位置で共存することによって、両者が極大化されるというものである。展示室の壁に縦横に掛けられた作品は、まるで壁に開いた窓から見える風景のようになる。作品と鑑賞者のあいだにひらかれる空間は、作家が捉えたその現場と同じである。外と内を行き来する間は、空け渡しと満たし合いという相互の配慮なしには成立しない。

彼が捉えたイメージが紙上にほのかに広がる空間において、与えられる「思索の時間」は、全て鑑賞者に委ねられている。これこそが、感性から「思索の間」へとつながるシーズン・ラオの芸術世界である。

the Asian Art Museum in Nice, France